



## 七 逃亡

---

「奈保子さん」

名前が呼ばれた。俊彦さんか。初めて聞いた。低い声だ。これまでの同級生たちの声とは違う。ママたちドローンの声は人間の女性の声のトーンと同じだ。

そうか。男性と女性は声が違うのか。単に遺伝子XとYの違いだけだと思い込んでいた。また、その隙間から見える体も自分たち女性と異なる。白いポロシャツと紺のジーンズを着ている。服の色が違うのではない。服の形が違うのだ。肩が広がり、胸は二つの膨らみはないけれど、全体的に厚い。そう、筋肉の付き方や骨格が違うのだ。もちろん、あたしと聖子ちゃんのように、女性同士でも体形は異なる。だけど、根本的になるのだ。

人類知能が男性を極端に排除し、病院等に押し込んだのは、異なる者を排除し、同質のもので調和を図ろうとするためなのか。奈保子は、俊彦を見て、ふと、思う。

ここしかない。大木と塀の隙間から、向こう側の芝生が見える。日が当たっているせいか、こちらの芝生よりも青く、生き生きとしているように見える。よし。俊彦は意を決した。まずは、隙間に右腕を差し入れ、大木の幹を抱く。そして、右足を差し込み、腕と同じように体を大木の樹皮に沿わす。できるだけ平たくして、体をすべらす。顔や服に覆われていない手や足の皮膚に樹皮がこすれる。痛い。痛みが走る。皮膚が擦り切れた。血がにじんでいるようだ。だが、後には引けない。それに、戻ることもできない。進むしかない。

痛みをこらえ、大木のRに沿って、体を滑らしていく。右手が何かに当たった。壁だ。足も延ばす。それに合わせて、体が大木の表面を半周した。抜けた。やっと抜けた。女子病棟に入ることができた。

だけど、体は一週間の命しかないからか、朝の七時前から鳴きだすセミのように大木を抱いたままだ。俊彦はいつまでもこうしてはられないと思いながらも、無事、大木と壁の隙間を抜け出せた安堵感からか、その場にしゃがみ込んでしまった。誰かが右肩に手を置く。俊彦はその手の上に左手を置く。温かい。大木や壁の拒絶するような冷たさとは違う。俊彦はその手の置かれた方向に振り向いた。

壁の隙間から何かが抜けてきた。壁は壊さなくても抜け出すことができるのだ。新たな出会い。その相手は、彼、俊彦さんだった。あたしは手を伸ばす。触れ合う。温かい。他人の手がこんなにも温かいとは知らなかった。そう言えば、他人と手を握ったのはいつだっただろうか。幼稚園の頃、運動会のお遊戯でお友だちと手をつないで以来だ。ママドローンとも手をつないだことはあったけれど、ママは機械だから冷たい手をしかなかった。けれど、冬になると、暖房機能が働くのか、トイレの便座のように、手が温かくなる。でも、所詮、機械だ。人間の血の、肌の温もりではない。これから、あたしの未来は変わるのか。この温もりと共に。

空を見上げる。青い。芝生を見る。緑だ。隣の病棟から見た空と芝生も同じ色だ。息を吸う。苦しくないし、とりわけ、頭が活性化するわけでもない。だが、違う。それは、心だ。自由になったんだ。その心が、空を一層青く見させ、芝生をよりリアルな緑色に見せ、空気を美味しく感じさせるのだ。これも彼女のおかげだ。彼女がいなければ、男性病棟から抜け出そうなんて思いもしなかった。

大木と壁との間に、無理をすれば通れるほどの隙間があるなんて思いもよらなかった。全て思い込みだ。思い込まされていた。パパドローンを始め、医師、看護師、先生、教授などのドローンや、同じ人間の先輩たちに吹き込まれてきたので、それを信じるしか、いや、疑うこともしなかったのだ。信じることはあきらめることであり、全ての道を遮断してしまうのだ。

だが、問題は、これからだ。男性病棟から抜け出し、自由を得たものの、ここは女性中心の社会。見つければ、ただちに、男性病棟に送り戻されるか、そのまま抹殺だ。これは本当に自由なのか。いや、障害や困難さがあるからこそ、自由なのだ。

あたしは自由だ。これまで、ママを始め、様々なドローンたちの声なき命令、忖度という自己縛りで、生活を送ってきた。しかし、今、目の前には、男性の、俊彦さんがいる。いや、俊彦さんと会えるように、自分の意思で動いてきたのだ。その結果なのだ。俊彦さんと会えたことも嬉しいが、自分で決めたことを実現できたことの方がもっと嬉しい。だが、これからどうするかだ。折角、俊彦さんと会えたのだ。このまま捕まるわけにはいかない。だが、本当のところ、どうしようか。

髪が肩まで伸びている。目は大きく見開き、ほっぺたにはえくぼが二つ。その顔は愛らしい。見ているだけで、緊張していた心がおだやかになる。女性にこんなに心が魅かれるとは思わなかった。

これまで、情報が取捨遮断される中で、こちらが必要とする情報は得られず、欲しくもない、垂れ流される大本営の情報だけにどっぷりと浸かったまま、他の男性とドローンとだけの世界で生きてきた。だから彼女、女性との出会いは驚きの連続だ。

当然、病院の中には、男性同士のカップルはいる。それも、肌の色や体形、顔立ちまで異なる人々だ。その中で、気が合い、魅かれ合う男性同士が家族として一緒に暮らすのだ。もちろん、ドローンのパパとだけで。個人として生きてもよい。それは、自由だ。そうした自由は与えられている。ささやかな自由を与えられることで、大きな束縛に不満を感じないのだ。

俊彦の周囲にも、友人同士でカップルとなったり、年上の男性と付き合っている者もいる。ドローンがいつも側にいるものの、やはり、人間の仲間が欲しいのだ。人は一人では生きられない。そうした人間の習性を、人類知能も、いや、それを作った英知の人たちも承知済みなのだろう、男性同士が家族を形成することには反対しない。いや、それで、返って、精神的に落ち着き、肉体的に安定が保たれるのであれば、この飼われた状況にも絶望せずに生きていけるはずだ。

だけど、俊彦には今のところ、そうした相手はいない。俊彦は仲間たちの同種を求めることに違和感ないものの、自分は少し違うのではないかと思っていた。もちろん、そんな考えは、パパはもちろんのこと、同級生たちにも吐露したことはない。しゃべろうと素持っても、喉に魚の骨が引っかかったかのように出てこなかった。いや、俊彦の潜在意識が、自分を守ろうとして出さなかったのだ。その先のことが見えていたのだ。この社会での孤立感。息ができない苦しさ。そんな中で、存在は知っていたものの、本当の、生の女性に出会えた。

だからこそ、目の前のそうした状況を頭は理解できずに、復旧見込みが立たずに停止中になっている。本当は、このまま、彼女の顔を見て、彼女の側にいたい。でも、そんな悠長なことは言っていられない。もうすぐ、昼休みが終わる。それまでに帰らなければ、パパを始め、警備ドローンたちが探しに来る。いつまでもここで、じっとしてられない。幸福もじっとはしていないのだ。動かないと。幸福の後を追うしかない。大きく息をした。

大丈夫。呼吸はできる。

こっちよ。あたしは左手で俊彦さんの右手を握り、走り出す。いつまでもここにいれば、ベッ

ドが空になったまま、トイレから戻って来ないあたしをママや看護ドローンたちが探しに来るだろう。このままでは、病院の中では、すぐに見つかってしまう。そうなれば、離れ離れになり、もう二度と、俊彦さんとは会えないだろうし、あたしの自由な意思も制限されるだろう。その先には、命はあっても、未来はない。さあ、急ごう。でも、どこへ。

女性に手を引かれて後に従う。生まれて初めてこのことだ。逃亡という緊張感が頂点に達している状況なのに、なんだか照れ臭い気持ちが湧いてくる。人は時と場合によって、様々な感情を持つのだ。だけど、そんなこと言ってはられない。とにかく、ここ、病院から出ることだ。

街だ。街に出られた。想像通りだ。インターネットで必要最小限のこの街の情報は得ていた。だけど、役には立たない、使うことができない情報だと思っていた。その街が今、自分の目の前にある。驚きはないものの、やはり、情報で知るとの、実際に目で見るのとは異なっている。同じ目で見ているのに、カメラを通してか、通さないかで、印象が大きく異なる。だが、現実と同じだ。それは、ただ単に、思い込みだけなのか。その現実を変えるために、現実を捉え直すために、病院を脱出したのだ。

行き先は、まずは、人目に、いや、監視カメラの目につきにくいところだ。街中、至る所に、監視カメラがある。監視のないところなんてない。いや、あった。神社だ。この科学が高度に発達した世界だけど、やはり、信仰はある。信仰の聖地、神社では、駐車場等にはカメラで監視されているけれど、一旦、鳥居を越えた境内の中までは設置されていない。人類知能もそこまでは監視するのを遠慮したのか。いや、人類知能が遠慮するわけではない。宗教的なものには監視の必要ない、監視することは神への冒瀆だと、英知の人々が人類知能に監視しないようにプログラミングしたのだろう。

そこだ。そこに逃げ込もう。このような監視社会を生み出した英知の人々に憤りを感じながらも、神社だけは監視からはずしてくれたことは感謝したい。確か、この近くに、神社があったはずだ。ママと一緒に、七五三のお宮参りに来たことがある。こうした伝統行事は、文化として引き継がれているのだ。さあ、目的地は決まった。もう既に、ママにも、医師にも、看護師にも、あたしがいなくなったこと、病院から脱出したことはわかっているはずだ。急がないと。

彼女はどこへ行く気だ。どこにしろ、一緒に着いて行くだけだ。こうして、追われているので

はないかと、必死で走り続けているけれど、ビルや家、走り去る車、談笑している女性たちを見ていると、物珍しくて、思わず立ち止まってしまう。街行く人に、自分が男だとわからないように顔を伏せながらも、チラチラとは顔を上げ、様子を伺ってしまう。

奈保子さんからは「顔を伏せて」ときつく言われるけれど、つい顔を上げてしまう。街を歩く女性たちと眼が会う。彼女たちは、自分に気が付くと、一瞬、目をこすったり、首をかしげたり、頭を振ったりしている。記憶の底にある、見てはいけないものを見た、禁忌を犯したような顔だ。

しかし、彼女たちのうち、小学生や保育園児のような子どもたちは、何かいたずらものを見つけたような顔で自分を見つめ、あどけない笑顔で手を振ってくる。なんだか、あの子供たちの輪に入ってみたくなる。だけど、奈保子さんは違う輪の中に入った。藁で編んだ大きなフラループの輪だ。そう、無病息災を願う、昔からの風習の茅の輪だ。すると、ここは神社か。僕たちの未来を守ってくれるのか。

ここまでやっと来ることができた。まだ、警察ドローンたちは追ってこない。ごほごほごほ。急にせき込みだした。急に走ったからだ。普段から、走ることはない。小学生や中学生の時は、体育の事業で、五十メートル走やハードルなど、陸上競技の授業もあったけれど、それはかなり前のことだ。逃げないといけないという強迫観念から、走れば心臓がバクバクすることも息はゼイゼイすることもすっかり忘れていたのだ。

神社の境内に入り、安心した瞬間、それが一斉にあたしの体に襲い掛かってきた。足はガクガク、お腹はゴロゴロ、脳はキーンキーンと唸っている。だめだ。まだ、安心はできない。倒れるわけにはいかない。何とか気を取り直す。神社の社の扉を開け、中に入る。神殿の中は、七五三でお祓いをした時以来だ。閉じ込められたむっとしてすえたような臭いの空気があたしを包む。あの頃のことが思い出される。

彼女が平気で神社の神殿の中に入っていく。大丈夫なのか。勝手に入って、誰かに怒られないのか。でも、よく考えれば、自分たちは逃亡者だ。いちいちお伺いを立てていたら、捕まってしまう。緊急の時なのに、なぜか、普段の道徳心が出てしまうのは、自分でも可笑しい。

「何が、可笑しいの」と彼女が振り向く。真剣な顔だ。「ここまで逃げて来られたので、安心して笑みがこぼれたんだよ」と慌てて否定する。本当の理由は言わない。すると、彼女も「そうね

。よくここまで来られたわね」と、先ほどまでの強張った顔が緩み、笑みがこぼれた。

笑顔だ。今、あたしたちに必要なのは笑顔なのだ。もともと、あたしたちは笑顔で結ばれたはずだ。しかめっ面の顔をするために、危険を犯して、逃亡してきたんじゃない。ありきたりの、決まりきった人生から、日常から、自分で選ぶという自由を求めて、ここまでやってきたのだ。あたしはありったけの笑顔を作る。あたしたちの未来は明るいはずだ。

でも、何かの音が聞こえる。何か飛行する音だ。空気を切り裂いている。あたしは、社殿の扉から外を覗く。ドローンだ。警察ドローンだ。他のドローンと違って、大型で、飛行速度が速く、飛行時間も長い。一旦、狙われたら、逃れることはできない。

なぜ。なぜなの。あれだけ、監視カメラには気をつけたはずなのに。それに、ここ神社は監視から除外されているはずなのに。あっ、そうだ。

奈保子は腕を見る。ブレスレットだ。ママからもいつも肌身につけるように言われているブレスレットだ。このブレスレットが自分たちの居場所を発信しているのだ。警察ドローンに知らせているのだ。

急いで、自分のブレスレットを外すとともに、俊彦さんのブレスレットも外し、社殿の扉を開けると、境内の外に投げた。そのブレスレットに警察ドローンが群がって、捕獲するとどこかに消えた。

逃げましょう。あたしは俊彦さんに向かって、そう声を掛けた。安住の地はここではなかった。

普段から、筋力トレーニングやスクワット、ランニングマシーンで鍛えているつもりだったけど、いざ、準備もなく、走り出すと体に負荷が大きい。健康体であることが、自分の生き残るための存在意義であったが、実践になると、予想外の展開に対して、ひ弱なものだということがはっきりした。これまでは、トレーニングのコーチのもと、予想した動きで予想された筋肉を動かしてきた。そのため、疲れることはあっても、心に余裕があったので対応できた。

だけど、今は、どうだ。彼女に引っ張られるように走っただけで、息が切れるし、足が重くなり、痛みが生じた。これまで練習してきた動き以外のことをすると全く手も足も出ない。自分は病

院という檻の中のモルモットであったことが身に染みてわかった。

ただ、落ち着く暇もなく、奈保子さんは、逃げましょう、という。本当に、どこに逃げるのか。どこに逃げ切れるのか。このままでは、逃げる前に、自分の体がバラバラになってしまうだろう。安住の地は本当にあるのか。

神社の神殿の裏に出た。ここは、巨木の神木、スギやケヤキなどの森となっている。ここにいれば安心かもしれないけれど、既に、人類知能にはあたしたちの逃げ場が分かっているだろう。取り合えず、ブレスレットを外して、誤魔化したものの、すぐに追手がくるだろう。この森を抜ければどこに出るのだろう。

すごい。自分が住む街にこんな巨木の森があっただなんて驚きだ。もちろん、生まれてからこの方、病院以外には出たことがないので、知っていても、訪れようはなかっただろう。

病院にも巨大な木があった。巨木は樹齢三百年とか四百年とかそうだ。千年に達する樹木もあるらしい。それに比べて、人の寿命はたかだか約八十年。確かに、樹木は人間にとって畏怖すべき、敬虔な対象かもしれない。神だって宿るだろう。それに、こうして森の中を歩いていると、何かしらが囁いてくるような気がする。その声の主は森の精霊、樹木の呼吸の音なのかもしれない。その呼吸に自分の呼吸を合す。新鮮な空気を吸い、浄化される体。こうした体験ができただけでも、彼女には感謝しないとイケない。もう逃げなくてもいいのではないか。

あたしたちは何をしているのだろう。俊彦さんと一緒に時間を過ごしたいだけだったのに、ドローンから逃げているだけだ。無意味な時間が経過しているだけだ。こんなはずじゃなかった。もっとゆっくりとした時を俊彦さんと過ごしたい。でも、そのためには、ドローンたちから逃げないといけない。この相矛盾する行動と事実。

あたしは俊彦さんの手を握り締めながら、落ち葉を踏みしめる。サクサクっという音が心地よい。この先はどこだ。あたしは顔を上げた。あった。あたしたちの隠れ家が。新天地が。